

平成 29 年 6 月 2 日現在

機関番号：36301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770154

研究課題名(和文) 接触に起因する言語変容原理の解明に向けた中国青海省大通県の漢語方言調査研究

研究課題名(英文) An Investigation of Datong Dialects of Chinese: Toward Understanding of the Mechanism of Contact-induced Language Change

研究代表者

川澄 哲也 (KAWASUMI, Tetsuya)

松山大学・経済学部・准教授

研究者番号：30590252

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：接触に起因する言語シフトが起きた場合、シフト側集団はしばしば、目標言語(TL)そのものではなく、自身の言語特徴を転移させた、或いは目標言語の一部特徴が欠落した、いわばTL2を習得する。その後、シフト側集団と目標言語集団の再接触が起きた場合は、両集団の共通言語として、TLとTL2の混合であるTL3が発生する。接触言語学では、TL3の形成に作用するメカニズムを“negotiation”と呼ぶ。本研究では、中国青海省大通県に分布する、土族語の影響を受けた漢語変種、遜讓変種(TL2)と青山変種(TL3)の言語調査を行うとともに、両変種を比較することによって“negotiation”の実態解明を進めた。

研究成果の概要(英文)：In the process of contact-induced language shift, members of the shifting group may carry over some features of their native language into their version of the target language (TL), which can be called TL2. They may also fail to learn some TL features, and these learners' errors form part of the TL2. If the shifting group is integrated into the original TL speech community, the linguistic result will be a mixture of the two, a TL3, and it will become the entire community's language. In the field of contact linguistics, the mechanism which operates to create TL3 is called “negotiation”. This project investigated the characteristics of the mechanism, by comparing two Chinese dialects, Xunrang (TL2) and Qingshan (TL3), both of which are the result of language contact between Chinese and Monguor, and are spoken in Datong Hui and Tu autonomous county, Qinghai province.

研究分野：言語学

キーワード：言語接触 青海省 漢語方言 土族語

## 1. 研究開始当初の背景

(1)他言語との接触、およびそれに起因する言語変容は、あらゆる言語が経験しているであろう普遍的な事象であり、従来より、個別事例の記述・分析を中心に、多くの研究蓄積がある。しかしながら、接触状況にある言語がどのような原理の作用によって変化するかという根本的な問題については、経験的に考察するのが難しいという理由もあり、これまでほとんど明らかにされてこなかった。一部の先行研究(例えば Thomason 2001)では数種類の原理が示されているが、それらはいずれも理論的観点から提案されたものであり、詳しい内部実態の解明には至っておらず、今後の実証的研究が待たれるものであった。

(2)中国有数の多民族地域である青海省東部地域一帯では、各地で言語接触が発生している。その影響は当地の漢語方言にも見られ、先行研究でも青海方言は大きな構造変容を来していることがたびたび報告されてきた。それらの方言データはいずれも言語接触研究を進展させる上で有用なものであると言える。しかし従来は、省都西寧市など、一部地域の方言のみが調査、研究の対象となっており、その他多くの地域の事例に関しては、簡単な報告こそあれ、詳細な調査研究が加えられたことはなく、その高い学術的価値を十分に活用できているとは言い難い状況であった。加えて、既に行われた青海方言の調査については中国人研究者によるものが大多数であるが、中国の方言調査は所定の調査票を用いて一定のプロセスで行われることが多く、このような方法の下ではその方言特有の言語現象は見落とされてしまいがちである。この点も従来の研究における問題点の一つであった

## 2. 研究の目的

本研究ではまず、青海省東部地域のうち、これまで体系的な言語学的調査が実施されたことのない大通回族土族自治州(以下「大通県」)の漢語方言について実地調査を行い、当該方言のデータ収集および構造特徴の記述を進める。この点は上述した「1.(2)」の問題点を補う意図をもつ。

続いて、その成果を土台とし、接触に起因する言語変容に関わる原理、特に“negotiation”と呼ばれる原理の実態解明を目指す。この点は上述した「1.(1)」の問題点を補う意図をもつ。(本研究での“negotiation”の定義は Thomason 2001:75 に従う。Thomason 2001:75 の概要は以下の通り: 言語シフトが発生した際にシフト側集団が習得するのは、目標言語[TL]にシフト側集団の母語が転移した、いわば TL2 である。その後シフト側集団と目標言語集団が再接触した場合、両集団間の共通言語として TL と TL2 の混合である TL3 が生じる。“negotiation”とは、TL3 の生成過程において両集団が行う、各種要素の取捨選択行動を

指す)

## 3. 研究の方法

本研究では大通県(特に県西部)の漢族と土族(モンゴル系民族)それぞれが話す漢語変容を扱う。大通県では、かつて土族が言語交替の際に生み出した、SOV 語順など特異な構造をもつ漢語変種が民族を問わず用いられている。

趙(1994: 336)によれば、大通県は民族の居住状況に特徴があり、土族が集住する村落(以下「土族村」)、漢族と土族が雑居する村落(以下「雑居村」)等が分かれているという。この状態は、上述した“negotiation”というメカニズムの実態を解明するための好条件であると考えられる。すなわち、雑居村の漢語方言(特に漢族が話すもの)は“negotiation”を経験したはずの変種(TL3)である。これに対し、土族村の変種は言語交替後の本来の漢語との再接触が限定的になるため、雑居村ほどの“negotiation”は経験しておらず、形成当時の原形(TL2)を比較的よく留めていることが予測される。そして両変種を対照することにより、“negotiation”の際に取捨された言語特徴を把握することができると考えられる。

このような見通しの下、土族村として遜讓郷古谷家村、雑居村として青山郷賀家庄を調査地に選定し、2014 年から 3 度にわたり調査を行った。土族村の協力者は Q 氏(土族・男性・1953 年生・農民)、雑居村の協力者は H 氏(漢族・男性・1948 年生・労働者)。いずれも就学経験のない非識字者で、当地の漢語方言のみを話す。なお上記「1.(2)」末尾で指摘した先行研究の問題点に鑑み、調査には自身が作成した調査票を利用した。

## 4. 研究成果

3 度の調査において、両調査地の変種それぞれについて、基礎語彙約 3000 を収集した。これを土台とし、2 変種の音素抽出作業と声調特徴の考察を行い、上述「1.(2)」の問題点を補った。以下に音声に関する成果の概要を列挙する:

- ・大通方言の分節音素は子音 24 個、口母音 5 個、鼻母音 3 個から成る。
- ・音節構造は「Initial+Glide+Nucleus / Tone」と表すことができ、Final を設定する必要がない点が特徴である。
- ・大通方言は音節声調ではなく語声調(word tone)である可能性が高い。

音声に関しては、一部分節音の実現形、或いは変調の仕方に細かな差はあったものの、Q 氏と H 氏に際立った違いは認められなかった(音声面のより詳細な内容は下記「5.」に挙げる雑誌論文を参照されたい)。

調査ではまた、センテンス約 500 も収集し、これに基づく文法特徴の分析も行った。本研究の第一の目的である“negotiation”の実態解

明と関わるので、文法特徴について以下にやや詳しく記す。

先にも触れた通り、大通県で話されている漢語変種はSOV語順を多用する。

- 1) 他 庄稼人 不 是。  
彼 農民 [否定] 繫辞  
「彼は農民でない。」
- 2) 我 今兒 飯 不 吃。  
私 今日 ご飯 [否定] 食べる  
「私は今日ご飯を食べない。」

また、名詞に後置される格標識も存在する。

- 3) 他 我 a 打 了。  
彼 私 を 叩く [完了]  
「彼は私を叩いた。」
- 4) 刀子 lia 切 肉。  
ナイフ で 切る 肉  
「ナイフで肉を切る。」
- 5) 我 她 lia 一 樣 高。  
私 彼女 と 同じ 高さ  
「私は彼女と同じ背丈だ。」

3の“a”は対格標識、4の“lia”は具格標識、5の“lia”は共同格標識として機能している。

ここまでで触れた文法特徴に関しては、土族村と雑居村の2変種間に差異は認められなかった。一方、奪格を如何に表現するかという点については、両変種間に明確な違いが見られた。雑居村の漢語話者は、奪格を標示する際にも、上述した“lia”を用いた。

- 6) 阿裏 lia 来 了?  
どこ から 来る [完了]  
「どこから来た？」

一方で土族村の土族話者は、“sa”という要素によって奪格を標示した。

- 7) 他 阿裏 sa 来 了?  
彼 どこ から 来る [完了]  
「彼はどこから来た？」

土族話者が用いた要素“sa”は、その形式および機能の類似性から、土族語の奪格語尾“-sa”(照那斯図編著 1981: 20)の転移であると考えられる。

以下では、上記の差異から窺われる言語変容の過程等を推測する。まず、TL2の原形を比較的留めているはずの土族村の変種が奪格標識“sa”を用いた点から、土族が言語交替した当時のTL2にも“sa”が存在していたと判断できる。一方、TL3にあたる雑居村の変種に“sa”が継承されていない事実に基づくと、TL2の“sa”は“negotiation”の過程で漢語話者集団に排除されたと推断することができる。排除された理由について現段階では、“sa”が土族語由来の文法要素であったこと、換言すれば「非漢語感」の強い要素であったことが関

わっていると考える。これを更に一般化した以下の見解を、本研究による「1.(1)」の問題に対する一つの成果として提出する。

「TL話者集団が『非TL感』を強く感じる要素は“negotiation”の過程で排除される。」

このような性質が存在することを理論的観点から予測するのは容易であるが、それを経験的な証拠によって立証した点は本研究の大きな成果であると考えられる。

大通県には、本研究で調査地として選定した地域以外にも、各地にTL2、TL3に相当する変種が分布していると考えられる。今後はそれら諸変種にも調査対象を広げ、上記の見解をより精緻なものにすることを旨とするともに、上記見解以外の“negotiation”の諸特徴も明らかにできるように、考察を続けていきたい。

#### <引用文献>

Thomason, Sarah G. (2001) *Language Contact. An Introduction.* Georgetown University Press.

照那斯図編著(1981)『土族語簡誌』民族出版社。

趙相如(1994)「大通回族土族自治县」中国社会科学院民族研究所・国家民委文化司主編『中国少数民族語言使用狀況』中国蔵学出版社、336-338。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### 〔雑誌論文〕(計8件)

川澄哲也(印刷中)「“協商”与漢語大通方言的語言变化」『言語文化研究』37-1、9p、査読無

川澄哲也(2016)「青海大通方言的声調 - 基於土族話者的語料分析」『アジア言語論叢』10、135-144、査読無

川澄哲也(2015)「青海大通方言的後置格標記」『福岡大学人文論叢』47-3、875-884、査読無

川澄哲也(2015)「青海大通方言的単字調与双字調」『福岡大学人文論叢』47-1、165-178、査読無

川澄哲也(2015)「再論漢語西寧方言的形成過程」『福岡大学人文論叢』46-4、925-945、査読無

川澄哲也(2015)「近代漢語『呵』の時間義用法に関する覚え書き(1) - 『元朝秘史』におけるモンゴル語仮定副動詞語尾の漢訳方法から考える -」『福岡大学研究部論集(人文科学編)』14-2、1-66、査読無

川澄哲也(2014)「青海大通方言的音段音系学」『福岡大学人文論叢』46-3、653-677、査読無

川澄哲也(2014)「西寧方言裏表示動作次

序的“【口+荷】”』『福岡大学人文論叢』  
46-2、351-361、査読無

〔学会発表〕(計4件)

川澄哲也(2017.03.30)「漢語大通方言と  
“Negotiation”」2016年度ユーラシア言語  
研究コンソーシアム年次総会、京都大学  
ユーラシア文化研究センター(京都府・京  
都市)

川澄哲也(2015.12.06)「青海方言為何不見  
音系干擾?」第二屆民族語言描写与比較学  
術研討会 語言接触与語言比較國際論壇、  
上海(中国)

川澄哲也(2015.11.01)「青海大通方言の声  
調 土族話者のデータに基づいて」日  
本中国語学会第65回全国大会、東京大学  
(東京都・目黒区)

川澄哲也(2015.01.10)「論西寧方言的形  
成過程」神戸市外国語大学 Research  
Project-B[アジア諸言語の通時的、共時的  
研究]研究会、大学共同利用施設  
UNITY(兵庫県・神戸市)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

川澄 哲也 (KAWASUMI, Tetsuya)

松山大学・経済学部・准教授

研究者番号：30590252